

母と娘の構図Ⅲ —*Twilight Sleep*に描かれる母性の喪失と女性のアイデンティティ—

田 中 栄 子^{*}

大阪青山大学健康科学部健康栄養学科¹⁾

Lost motherhood and female's identity in *Twilight Sleep*

Eiko TANAKA

Faculty of Health Science, Department of Health and Nutrition, Osaka Aoyama University

Summary Both of Wharton's "The Old Maid"(1924) and *The Mother's Recompense* (1925) have the same theme of the relationship between motherhood and female's sexuality. *Twilight Sleep* (1927), published two years later *The Mother's Recompense*, adds another theme to it. It also focuses on an icon of family's identity, especially mother and daughter. Therefore, as seen in Lewis's comments, this novel might be "the most plotted of Edith Wharton's novels." While Wolff is critical to it as "*Twilight Sleep* is chaotically plotted," she analyzes it as "some of this anarchy is undoubtedly intended as a reflection of the disjointed quality of life in postwar America." In this novel Wharton proposes a problematic theme of the relationship between motherhood and female's identity that has been developed in the times of Taylorism and Fordism after the First World War in America. Even now in 21st century, in which descendants of Pauline, Nona and Lita live, the concept of motherhood related to female's identity should be deliberated in the aspects of changing world. Wharton's *Twilight Sleep* is full of suggestions and insights into modern female's identity. (accepted. Nov. 17, 2008)

Keywords : motherhood, female's sexuality, female's identity

母性, 女性のセクシュアリティ, 女性のアイデンティティ

Whartonの後期の作品 "The Old Maid" (1924)のふたりの母親, *The Mother's Recompense*(1925)のひとりの男性を巡るふたりの女性としての母と娘, いずれの作品でも女性のセクシュアリティと母性との相克葛藤が問題視されているが, 1927年に出された*Twilight Sleep*ではそのテーマをベースに更に家族の中の母と子(娘)のアイデンティティを総括的に問うテーマが加わる。それゆえテーマが複層的になり, Lewisに至ってはこの作品を "the most plotted of Edith Wharton's novels" (Lewis 474)と言明している。また, Wolffの批評も "*Twilight Sleep* is chaotically plotted" と厳しいものがあるが, 続けて "some of this anarchy is undoubtedly intended as a reflection of the disjointed quality of life in postwar America." (Wolff 376)と述べているように, Whartonが描くこの「母と子(娘)の物語」は, 戦後の混乱を経て成立した現代社会の利便性や合理性を背景に育むことを余儀なくされる女性の母性と自らのアイデンティティを問う作品になっていて, 作

家Whartonの女性観(母性観)を考察するには興味あるものに仕上がっている。Lewisは "a melodramatic way of suggesting that young people in American society had become the victims of their elders" (Lewis 474)と酷評しているが, それだけでは割り切れない現代社会が持つ大きなテーマの一端である母親, 子ども, そして家族の肖像(アイコン)の問題点がこの作品には描かれる。Whartonが辿り着く「母と子(娘)」のアイコンは21世紀を迎えた現代社会が抱える問題をも予言している。

I

1850年代のold New Yorkを舞台にした "The Old Maid" (1924)では, 母性を体現する実母と養母, そしてその娘の相関関係は3人の根幹的同一性が感知されユング理論の適用も可能であるが¹⁾, 翌年出された*The Mother's Recompense* (1925)では母対娘の構図はひとりの男性を巡るライバル的関係の構図に置換され擬近親相姦のテーマ

* E-mail: e-tanaka@osaka-aoyama.ac.jp

1) 〒562-8580 箕面市新稲 2-11-1

も加わり、女性の持つ母性とセクシュアリティの融合度の困難さを読者に問いかけた²。母親の属性だとされる母性についてRichの定義(Rich 12-13)が適用できるように、“The Old Maid”では“the institution”(「制度」)としての母性に惑わされるふたりの女性に焦点が置かれるのに対し、*The Mother's Recompense*では子どもとの“the potential relationship”から逃れられない女性が主人公である。つまり、両作品においてはいずれも母親としての女性、子(娘)としての女性の領域が区別化されていて、“The Old Maid”では最初から最後までふたりの母親と娘はそれぞれの役割を演じ、また*The Mother's Recompense*では母と娘が最終的には異なる時間軸を選び、それは今後交わることがないことが予測され、母親Kateは母の立場を完全に捨て去ることなく娘の前から姿を消す道を選択する。

それに比べて、*The Mother's Recompense*から2年後に出版された*Twilight Sleep*では前の2作品とは異なり定義化された母性イメージを読み取ることは難しい。*Twilight Sleep*で描かれる母と娘は生物学的には親子関係の図式化は可能なのだが、エートスやペルソナの観点からは母や娘の肖像(アイコン)は確立されないばかりか、時折関係の転倒や逆転化が洞察でき、前の2作品とは趣を異にしている。Ammonsは、Whartonの1920年代のアメリカについての小説はそれまでと違った女性や結婚に対する彼女の態度が伺え、結婚と家庭生活が女性の自己実現の最良の手段であることを論じようとし、*The Mother's Recompense*ではそのテーマを刑罰的に描いているが、*Twilight Sleep*はその説得力に欠ける作品に仕上がっていると解説している(Ammons 165)。しかし、それは、母親であるKateやPaulineの生き方、娘であるAnneやNonaの生き方は、結婚生活が自己実現を希求した形態であることを肯定しているものではない。それよりむしろ、自己実現、つまり自分のアイデンティティ確立のために結婚の意義を考える娘にとって、母親の生き方は反面教師的役割をも担っているのである。Anneは母親とひとりの男性を争うことで娘としての範疇を離脱し、ひとりの女性としてのアイデンティティ確立に進んでいった。一方Nonaは友人でもある義理の姉にあたるLitaの結婚生活を身近に見て不安感をつのらせ、母親Paulineの存在を認めつつも自分の生き方を真摯に模索する若い女性として描かれる。戦争を体験したWhartonにとって戦後の社会は“America's infatuation with the flapper, the national glibness about divorce, the neglect of children, the self-absorbed quest for thrills and instant happiness, the mania for change for its own sake, the scorn for intellectual independence or

disciplined art”つまり、“all evidenced a retreat from adult responsibility and the difficult realities of mature human experience”(Ammons 173)の世界であることを強く印象づけた。1920年代の彼女の社会批判は人間社会の核とも言える家族のあり方に焦点をあてた作品で展開されたと言える。

II

アメリカの1920年代は戦争を体験したLost Generationの時代である一方、片や戦後の物質的繁栄と大衆文化が隆盛を極めたJazz Age, Gilded Ageでもあった。時間に関するアメリカ的な観念の変遷について研究したオマリーは「金ピカ時代のアメリカ人は多くの異なる目的のために膨大な数の多種多様な時計を買い込んだ」(オマリー 162)と述べているが、機械計時器が意味するものはスケジュールや約束などのコントロールすることのできるものを含んでいたことを指摘している。*Twilight Sleep*の時代背景はまさしくこのGilded Ageの20年代であり、作品の中で、戦後のアメリカの資本主義社会の代表都市New Yorkの上流階級の一員であるPaulineの毎日は、分刻みのスケジュールで追われることが常態化していた。ただ、“7.30 Mental uplift. 7.45 Breakfast. 8. Psycho-analysis. 8.15 See cook. 8.30 Silent Meditation. 8.45 Facial massage. 9. Man with Persian miniatures. 9.15 Correspondence. 9.30 Manicure. 9.45 Eurythmic exercises. 10. Hair waved. 10.15 Sit for bust. 10.30 Receive Mothers' Day deputation. 11. Dancing lesson. 11.30 Birth Control committee at Mrs. __”(3-4)と、ある朝の彼女の分刻みのスケジュールは2,3の社会的名誉職の仕事を除くと、ほとんどが自分の美貌と体型を維持し心身の安定を心がける裕福な有閑マダムの気晴らしに過ぎない。それを全てがいかに自分の義務や責任の如く考え行動しているヒロインをWhartonは当時の世相を反映させて滑稽に皮肉っている。

Paulineは“‘There's a time for everything’”(5)をモットーにGilded Ageの物質的反映を享受する楽観主義的の生き方をする当時の上流階級の代表的ペルソナとして描かれる。*The Mother's Recompense*の想像と幻想の世界に住んでいる「楽観的」なKate³と異なり、Paulineは自分の眼前にある現実が全てであり、その裏面に潜む不安や危険に思いを巡らすことはない。そういう彼女のoptimismが結果的に一家の不幸を招いたと言っても過言ではない。PaulineはJimの結婚に関しても、孤児で評判の悪い叔母に養育されたLitaと結婚することがJimの人間としての成長につながると喜び、Litaをよく知る繊細な娘Nonaがふ

たりの離婚の可能性を心配し示唆すると、言下にその可能性を否定してしまう。つまり、彼女は自分の家族は世間一般のスキャンダラスな事件とは全く無縁な一家だと頭から信じて疑わないところがあり、人生は毎日のタイムスケジュールのように過ぎていくものだと思っているようだ。

このような彼女の思考から、1911年に*The Principle of Scientific Management*を著したFrederick Taylorの主唱するTaylorismの影響下の時代をヒロインが生きていたことをWhartonは示唆しているのではないかと推測できる。オマリーが機械計時器は時計という機械とその所有者とのあいだに個人の権威やアイデンティティの不思議な融合を促した（オマリー 62-63）と述べているが、時計時間は規律や監督、支配へと関連づけられ、標準化された時計時間の広がりには機械を最終的な時間の権威、労働のモデルとして確立するにいたる産業労働の場でTaylorismに応用された面がある。Taylorは効率フェティシズムで時間、時計、そしてそれらの権威との関係を合理化したと言われるが、この「科学的管理法の父」の考え方は、なによりも効率を求め、可能なかぎり無駄を省き、最大限の効果をあげること、人間の強情さや怠慢さ、すなわち、人間が他人のために働くところで必ず生じる独特の扱いにくい癖、ないしは墮落を取り除く鍵を見つけることだった（オマリー 174）とされる。無関係で不必要な無駄な動きの削減を強調したTaylorismは、Paulineが“de-microbe life”（60）を望み、Litaの出産のために“twilight sleep”の完備した病院を用意する彼女の行動に通じるものがある。

“Mrs. Manford. . . of course knew the most perfect “Twilight Sleep” establishment in the country, installed Lita in its most luxurious suite, and filled her rooms with spring flowers, hot-house fruits, new novels and all the latest picture-papers—and Lita drifted into motherhood a lightly and unperceivingly as if the wax doll which suddenly appeared in the cradle at her bedside had been brought there in one of the big bunches of hot-house roses that she found every morning on her pillow. (14)

Paulineの浅薄な虚飾に満ちた思考回路は““Of course there ought to be no Pain . . . nothing but Beauty. . . It ought to be one of the loveliest, most poetic things in the world to have a baby,”” (14)と言明するにいたっては、Taylorismと同時期にアメリカの産業界で成功を納めたFordismの理念とも共通するものがあり、赤ん坊を“something to be turned out in series like Fords” (15)だと考えるくだりは、20年代の母親である彼女の感情（母性）は「楽観主義的

な」Kateとは異なり、人間の感情を排し合理的、革新的である。ただ、彼女がKateと異なり離婚を経験した再婚者であることで、自分の苦い体験から築き上げた現在の結婚生活への信頼を自ら否定しなくなかったことが、彼女の楽観主義的思想に影響を与えたことは否定できないだろう。Wershovenは“The title of the novel refers specifically to a new process by which childbirth can be made painless, but it refers more generally to all the different attempts that the book’s characters make to avoid pain.” (Wershoven 131)と解説し、*Twilight Sleep*は“evasion”についての小説だとし、“Each character in the book, with one exception, has one goal: to get through life without suffering; and each numbs his sensibility in a different way: through the pursuit of pleasure, through bad faith, through false credos, or through self-delusion.” (Wershoven 131)であると分析している。つまり、この小説の登場人物たちは「まやかし」の生活をそれぞれ送っていたことになるのだが、その中で娘Nonaだけは、彼女にとって“Life was a confusing business” (50)だと感じつつも誠実に自分の生活に立ち向かっていった。

III

Paulineの娘であるNona Manfordはこの作品中で母親的役割を担うキャラクターである。彼女はLita同様new generationに属する若い娘なのだが、“incorrigible honesty” (7)でLitaに対しても母親のような口調で話し、異母兄弟のJimのLitaとの結婚が彼女の“first real sorrow” (12)になったとあるように、楽天的な母Paulineと違い、むしろ悲観主義的な彼女はこの作品中悲劇的役割を演じることになる。父親Dexterが“Nona was the one warm rich spot in his life: the corner on which the sun always shone.” (62)と思うほど、彼女は両親DexterとPaulineの自慢の娘である。“optimistic”なPaulineはNew York社会のリーダー格的セレブの一員であることを強く自覚し、自分たちは周囲で起こる離婚を始めとするスキャンダルとは無縁な一家であることに信念を持ち続け、表面的に母親や義母の役割を自覚して将来の家族の肖像への不安は極力考えないようにしている現実派だが、娘NonaはLitaと同世代であるが、時に理解不能な言動を伴う新人類の代表的ペルソナのLitaとは違って“she had had glimpses enough of the scene” (5)とあるように、持ち前の思慮深さで母親に代わって敬愛する兄JimとLitaの結婚生活の持続を心配したりする—“Nothing beyond the vague question: what would a woman like Lita be likely to do if she suddenly grew tired of the life she was leading?” (31)。

“There were moments when Nona felt oppressed by responsibilities and anxieties not of her age, apprehensions that she could not shake off and yet had not enough experience of life to know how to meet.” (47)とか、Jimが結婚したことで彼には「目的」ができたなどと話し、Arthurから“How very old-fashioned!” (49)と言われるほど、Nonaはnew generationに属する20代の若者には見えないところがある娘である。最終的に彼女が犠牲になることで一族の家庭の危機を表面的に救済することになるのだが、

“The Old Maid”の娘Tinaや*The Mother's Recompense*の娘Anneとも異質に異なる娘NonaのキャラクターゼーションへのWhartonの意図は何だったのか。“The Old Maid”では母親のシャドウとしての娘Tinaは母親と相似の青春時代を謳歌し、*The Mother's Recompense*では母親と愛する男性を競合する娘Anneは反面教師として母親の生き方を参考に自分の道を切り開いていく。このようにいずれの作品でも母と娘の領域の差別化は歴然としていて、一次的に交錯することはあっても母親のライフスタイルはプラスやマイナスの遺産として次世代の娘に引き継がれていった。だが、「母と娘の構図」3部作だと位置づけることが可能なこの作品では⁴、母親のシャドウでもなくまた母親を反面教師として人生を考えるわけでもない、母親に代わって家族を心配する娘が登場する。Nonaは母親の「愛他的エネルギー」を賞賛するが、母親の生き方を肯定も否定もせず、optimisticな母親にない洞察力で家族の平和と幸せを憂い、新世代の若い娘でありながらLitaのように自分の欲望に忠実でもなく、“the early ‘eighties” (43)に生まれてこなかったことを残念がり、愛する男性との不倫に陥ることもまた彼を離婚に追い込むこともなく、自ら自分の感情を封印できる老成したところのある若い娘である。“She thought: “I feel like the oldest person in the world, and yet with the longest life ahead of me . . .” and a shiver of loneliness ran over her.” (281)と、当時の世相の波にもまれることもないNonaの孤独感は彼女の倫理観が大きく作用している。

“Nona, . . . does not fit into the world of Twilight Sleep” (Wershoven 135)と指摘されるように、Nonaは時代に合わない生き方をしているかもしれない。TaylorismやFordismに象徴されるようなGilded Ageの合理的、能率至上主義的な繁栄の時代にも光の当たらない蔭の部分が存在するわけで、optimisticな母親Pauline、自己主張の強いLitaが時代を代表する生き方をするタイプとするなら、Nonaはアメリカが持つ清教徒的禁欲主義を忘れずに守る保守的で非寛容な人物像のように映る。ただStanleyとの一件で敬虔なクリスチャンで清教徒的モラルコードを振りかざ

す彼の妻Aggieと比較するとき、Nonaの人物像は若さに似合わず思慮分別をわきまえた賢明な女性とも解釈できる。flapperで代表される当時の若い娘と違い、世の中の流れに乗れない「心配性」の若い娘は自らを犠牲にすることで一族の安定を取り戻す役割を負う。痛みを伴わない安楽な過程を経ての行動世界、つまり“twilight sleep”が表象する世界は、実は結果的に大きな犠牲を伴うことになるのだということをWhartonはNonaの存在で教えることになるのだが、Nonaのキャラクターゼーションは19世紀の小説のヒロインと重なり合うところがあり、母親Paulineやflapperでライバル的存在のLitaに比較して活写的魅力に欠けることは否めない。彼女の若さは常道の道徳的判断の蔭で埋もれ、Lita同様スポーツ好きで踊りにクラブに出入りするところもある当時のnew girlの要素はかき消される。そして最後は、納得できない家族の無軌道ぶりに心身共に傷を負い、結婚より尼寺に行くことを望む悲劇的ヒロインに変わっていくのはセンチメンタルだと批難されるところではあるが、これはWhartonのモラルコードの一端をNonaの存在で表象していると解釈すべきであろう。

IV

Wershovenが“intruder”のひとりに挙げる(Wershoven 132-33)Litaは、この作品における母と娘の関係を考える際に、両者の別存在化のテーマを提供するニューモデルである。母親であると同時に娘（嫁）である存在のLitaは義母Paulineや小姑（友人）Nonaとそれぞれ共通点を持つ⁵が、ふたりとは対照的に描かれていて、この作品の“twilight sleep”的世界を生きる代表的ペルソナである。Wharton作品のヒロインの系譜を辿ると、Litaは孤児で異端者扱いされる叔母に養育され属する社会と異質性を持つところは*The Age of Innocence*のEllenにつながり、母親ではあるが母親としての存在よりも個人の自己主張が強いところは*The Custom of the Country*のUndineの類型に属し、映画デビューに興味を持つ芸術的関心は*The House of Mirth*のLilyの“tableaux vivants”を思い起こさせ、incest的セクシュアリティは*Summer*のCharityとテーマの問題性を共有する。Whartonはnew girlであるflapperの母性については*The Children*で更に論争を深めることになるが、この作品におけるLitaのキャラクターゼーションは当時の時代の申し子の女性の生き方とアイデンティティ、セクシュアリティに関するWhartonのヒロインの系譜の関連性を考えると興味深い。

“half-dancing, half-drifting, fastening a necklace, humming a tune, her little round head, with the goldfish-coloured hair,

the mother-of-pearl complexion and screwed-up auburn eyes, turning sideways like a bird's on her long throat" (32)のLitaは飽きっぽく忘れっぽく自分の望みが受け入れられなければ, "I've been so bored here." (34)と屈託もなく自己主張する。Litaには母や妻としての自己認識が乏しいのだが, 夫や子どもを愛していないわけではない。

Nona laughed. "You'd be bored anywhere. I wish another Tommy Ardwin would come along and tell you what an old *cliché* being bored is."

"An old *cliché*? Why shouldn't it be? When life itself is such a bore? You can't redecorate life!"

"If you could, what would you begin by throwing into the street? The baby?"

Lita's eyes woke to fire. "Don't be an idiot! You know I adore my baby."

"Well—then Jim?"

"You know I adore my Jim!" echoed the young wife, mimicking her own emotion. (34)

しかし, Litaの子どもに対峙する感情はRichの母性論では総括できないものがあり, 彼女の存在, 生き方, つまり彼女のアイデンティティの定義に子どものファクターは重要な意味を持たない。

Litaは当時の上流社会の女性像から逸脱したヒロインで, 彼女のキャラクターゼーションはflapperやnew girlという言葉で簡単に定義しきれないものがある。彼女の自然児ぶりは責任感とか妻や母の役割コードに無頓着で, 彼女の感情が彼女の行動規範になる。夫や子どもの存在は彼女の「退屈感」を凌駕することではなく, 彼女は自分の存在を確認できる場所を捜し求める。セクシュアリティを含む自分の感情に何の躊躇もなく素直に従おうとする彼女の生き方は, 現代の女性にも通じる一種の憧憬を表象しているのかもしれない。Litaは21世紀の現代女性も例外ではない精神的飢餓感, つまり自覚存在を模索する女性像で, 彼女の場合は自己アイデンティティの確立を当時の世相と相まって, 真摯というよりは表層的, 刹那的に追求したと言える。Gilded Ageのイージーでバブル的世相の反映をLitaのキャラクターゼーションに感じ取ることができ, そういう女性に近親相姦の危険を察しながらも, New Yorkの上流社会の虚栄と欺瞞に疲れ「退屈」を感じ始めていた田舎育ちのDexterが惹かれていったのも, 豊かさの中の腐敗, 繁栄の中の翳りの表象と解釈でき, 背景に禁欲的倫理的清教徒的色彩の強かった時代から合理的物質資本主義時代への推移があるのも看過できない。経済的にも政治的にも社会が安定してくると社会通念の変化の兆しが現れてくるもので, 20年代

のアメリカは道徳倫理面における変化と相まってflapperのような女性の登場から推察できるように, 女性の生き方, 考え方にも従来と異なる様相が現れてくるようになったことを, WhartonはLitaを通じて描きたかったのではないのか。妻であり母であっても自由な自然児としての個人のアイデンティティが最優先される女性の生き方を, WhartonはLitaを通してその活写化に成功している。The Custom of the CountryのUndineの悪女イメージは同系譜のLitaに至っては, Dexterが彼女の最大の魅力として感じる "animal sincerity" (190)として昇華され, 彼女の生き方は世俗な社会通念のコードでは理解できないものになっている。

V

Litaの "animal sincerity" は彼女の行動を解くファクターで, 彼女のエロティシズムが誘因となるこの作品のインセストの問題を考察するとき, あるヒントを与えてくれる。バタイユは近親婚の問題に関して「本質的に言って, エロティシズムは動物の性活動と対比された人間の性活動である」(バタイユ 33)と定義し, 純潔自体も「エロティシズムの諸々の様相のうちの一つであり, つまりは本来人間的な性活動の一つのアспектなのである」(バタイユ 33)と述べ, 人間の性的欲望の対象はきわめて普遍的な精神の恣意的な思いつきであり, エロティシズムの世界はその形態においてフィクションであり夢に類似したものだが, その奇怪さを知るためにもその逆の世界, つまり性活動が禁じられている世界の境界を認知し規則たる由縁を考えると, 近親婚の禁制こそそういう規則の典型だとし, 近親婚の問題をレヴィ=ストロースの『親族の基本構造』に言及する (バタイユ 35-36)。レヴィ=ストロースは「規則が存在するという事実こそが, その存在様式とは全く別個に, 近親婚禁止のまさに真髄なのである。何故なら, もし自然が婚姻関係を偶然性と恣意性に委ねるとしたら, 文化は, 全く秩序のないところへ, どんな性質のものであれ, 何らかの秩序を導入せざるをえないからである。文化の本源的な役割は, 集団が集団として存在することを保証すること, したがって, 他のあらゆる分野におけると同様この分野においても, 偶然の代わりに組織を置くことにある」(レヴィ=ストロース 100)とし, インセストのタブー性を強調した。「人間は生物学的存在であると同時に社会的個体である」(レヴィ=ストロース 56)とするストロースの論を適用すると, 20年代のGilded Ageに急成長を遂げた現代社会の文化的基盤が秩序と共に多様な思考のもと混乱を招くようになってきたとき, 人間のエロティシズムは

社会規範を脅かす事態を発生させるファクターになったことは大いに推測できることである。

ストロースは「近親婚の禁止は、母、姉妹あるいは娘を娶ることを禁止する規則であるよりはむしろ、母、姉妹あるいは娘を他の人に与えることを強いる規則である。それはすぐれて贈与の規則である。(中略) 近親婚の禁止の解釈の誤りはすべて、それ自身の固有の限界と可能性を各個人ごとにそれ自身から引き出す不連続な過程を、婚姻のうちに見ようとする傾向に由来するのである。まさにこのようにして、母、娘あるいは姉妹の固有な性質のなかに、彼女らとの婚姻を避ける理由がもとめられるのである。ひとはそのとき、まちがいに生物学的考察へと誘いこまれる」(レヴィ＝ストロース 832)と述べ、女性に関する言及で「母性、姉妹性あるいは娘性が当該の個人の特性であるのは、ただ生物学的な、だがもちろん社会的ではない視点から見たばあいにすぎないからである。しかし、社会的視点から吟味を加えるなら、これらの資格賦与は孤立した個人ではなく、これらの個人と他のすべての個人のあいだの関係を定義しているとしかみなしえない。たとえば、母性とは、ある女性とその子供たちだけでなく、この女性とその集団の他のすべての成員との関係であり、これらの成員にとっては、彼女は母ではなく、姉妹か妻かイトコか、あるいは親族関係のもとでの単なる他人にすぎない」(レヴィ＝ストロース 832)と説明しているが、ストロースの論でLitaの母性とインセストの問題を考えると、それは単なる不道德の問題だと簡単に片付けられないものを残す。

Litaは「生物学的」には母親であるのだが、社会的には彼女のアイデンティティの本質は母性とは乖離したところにある。彼女の“animal sincerity”は「規則が存在する」文化(社会)の秩序とは相容れないもので、「本来人間的な性活動の一つのアспект」であるエロティシズムを含む自我意識で構成されていて、Richの母性論の「制度」としての母性も「子どもとの潜在的な関係」を保つ母性の感情も彼女の言動からは感じられない。つまり、Litaにとって母親になったことで自分の個性(アイデンティティ)が変化するわけではなく、「本来人間的な性活動の一つのアспект」であるエロティシズムも純潔も彼女にとっては自然な“animal sincerity”なのである。Gilded Ageが育てたflapperを代表するLitaの存在は、機械文明の発達と共に痛みを伴わない出産(twilight sleep)により、娘から母親(母性)への変化の自覚を持たない女性が登場しつつあることを表し、TaylorismやFordismの台頭に伴う時代の流れと共に女性のライフスタイルが変化をきたしてきたことを、WhartonはLitaを通して描いている。

VI

『姦通の文学』(*Adultery in the Novel*, 1979)において、トニー・タナーは姦通は18世紀後半から19世紀の小説において重要な意味を持つと述べ、「19世紀小説において姦通により汚された結婚がどうなるか」(タナー 135)、その意味を明らかにするための手掛かりを、ここでもまた親族のシステムを一連の交換規則として作用しているものと捉えるレヴィ＝ストロースの考察に求めている。レヴィ＝ストロースが結婚の特性として明らかにしているように、「問題は、結婚を支配する交換規則を持つためには、すべての女性は自然種としては同一であるのに、そのあいだに差異を設け、女性たちに様々な異なるカテゴリーを設定しなければならないことである」(タナー 136-37)。なぜなら「19世紀のブルジョア社会においては、(中略)人間が自分自身を、そして世界における自分の位置を考える上で、中心となるのは結婚だからである。(中略)結婚は自然の生産と社会的なカテゴリー化の出会い場所であり、両者のあいだで可能な調和が達せられたという了解を表す信号である。同様に、結婚が脅威にさらされるとき、それは両者がばらばらになるときだろう」(タナー 138)とし、レヴィ＝ストロースが強調した女性の交換の優越性から女性は自然の局面においては相互交換が可能であり、その互換可能性のために高度産業社会における人間の状況が疎外されたものとして語られるのだとしている。つまり、19世紀の妻たちには、自分は相互交換可能でありながら代替物がないという、矛盾を孕んだシステムに身を置いていると感じられ、「妻という社会的な身分証明を与えてくれる契約に違反すれば、彼女は非差異化の悪夢に巻き込まれてしまうだろう」(タナー 139)、つまり結局、「結婚という交換の相互性のみが普遍性を主張しうる」のであるが、明晰にモデルを提示したレヴィ＝ストロース的なものは19世紀小説には期待できないけれども、「小説家は何よりも精力を傾けたのは、結婚の規則や観衆として働いている女性のシステムであった」(タナー 141)とし、タナーは「姦通を問題にする小説家は、交換の全システムのみならず、社会そのものの基盤たる自然と文化の媒介システムすべてが、いかに根拠の薄弱なものかを示すのである」(タナー 142)としている。

タナーの論は20世紀初頭に現れたWhartonの*Twilight Sleep*のテーマを考察するときに示唆に富む提言となる。タナーはレヴィ＝ストロースの見解に従い、構造とは人間精神の働きを規定する「論理」すなわち「コード」だとし、ブルジョア小説はそれ自体が社会の基底構造の秘密に近づくと思われるとき、小説は社会全体に脅威を与

え始めるのだとし、この社会全体に対する脅威作用を姦通小説が及ぼし始めたのではないかと考察している（タナー 142-43）。そして、最終的に結婚のシステムこそが社会の基盤だということになり、結婚の規則、経済規則、そして言語規則が何らかの形で体系的な相互依存状態であるとするなら、そのうちのひとつの崩壊は三者全ての崩壊の可能性を暗示することになり、「結婚の契約が根底的に破られれば、経済の契約も曖昧なものになり、作者は自分と読者との「契約」を破らざるを得ないという状況に立たされるかもしれない。ブルジョア小説家としての危機とは、接触の危機ではなく、彼〔彼女〕自身が構成員の一人である社会の交換システム一切を巻き込む契約の危機であった、と言えよう」（タナー 144）と論じ、「18 世紀及び 19 世紀小説は結婚と家系の持続の確実な実現に向けて展開すると言われるようだが、そこでの物語をつき動かす独特の原動力が、社会の基盤たる家庭の安定とすぐにも衝突しかねないエネルギーから得られている場合が少なくない。こうして小説は社会の中の逆説的存在となる。それは決して家庭の室内装飾の目立たぬ付属品などではなく、祝福しているかに見えるものを打ち倒すよう作用するかもしれぬテキストである」（タナー 20）としているが、19 世紀から 20 世紀にかけて小説を書いた Wharton にとっても、20 世紀初頭の Gilded Age における時計時間の広がりから効率主義的 Taylorism や Fordism が台頭した高度産業社会を時代背景として、「結婚の規則」の崩壊の可能性が不倫や離婚によって徐々に人々の生活の中に現れてきつつあることを感知し、彼女はその一端を *Twilight Sleep* で描いたと言えるだろう。

Wharton の“姦通の文学”作品である *Twilight Sleep* では、社会の基盤である結婚のシステムが世情の影響を受け、異なるカテゴリーから成る女性像、すなわち母、娘、妻、嫁の差異化が判然としない「悪夢」的世界に陥る危険性を表しているとも解釈できよう。また、機械文明の発達で“twilight sleep”的システムで娘（子ども）のまま母となる new girl である flapper の出現等により、20 世紀の女性たちは自分のアイデンティティを真剣に模索しなければならぬ段階に入ったことを *Twilight Sleep* は語っているとも解釈できる。それは明快な痛みを伴わないがゆえに、エピグラフに掲げられた *Faust* の *Sorge*（「憂愁」）が語る“*Ich bin am rechten Ort.*”（「来るべき所に来ているのです」*Faust*. Teil II. Akt V.）の言葉のように、明晰な解答が出ない時代と共に女性たちの役割も変遷を余儀なくされることを暗示していると言えよう。母性の喪失と共に考えられる母と子（娘）のアイコンの変化は、21 世紀を迎えた現代でも考察されるべきテーマであり、Wharton の予

見に満ちた作品 *Twilight Sleep* はその指針の一端を提示していると言える。

Notes

- 1) “The Old Maid” における母と娘の関係のユング論的解析は、拙論「母と娘の構図 I — “The Old Maid” における母性のゆくえ」（『大阪青山短期大学研究紀要』第 31 号 71-77 を参照されたい。
- 2) *The Mother's Recompense* における女性の母性とセクシュアリティとの相克葛藤については、拙論「母と娘の構図 II — *The Mother's Recompense* に描かれる幻想の Motherhood」（『大阪青山短期大学研究紀要』第 32 号 89-96 を参照されたい。
- 3) Wolff 363 を参照。
- 4) Wharton は 1920 年代に “The Old Maid” (1924), *The Mother's Recompense* (1925), *Twilight Sleep* (1927) と続けて母と娘の関係をテーマにした作品を出版した。また、Ammons の次の文も参照。“for the first time she [Wharton] became very interested in their [young children's] welfare and in the conduct of their mothers in the 1920s. Probably this had something to do with her own age and childlessness; surely it had a lot to do with the war she had recently been through and the new world she now saw around her. Both drove her to think about motherhood” (Ammons 170).
- 5) Wershoven は作品における “intruder” として Pauline, Nona, Lita を挙げ、それぞれの共通点と相違点を述べている (Wershoven 131-135)。先述したように new girl である Nona と Lita はスポーツやダンスを好む点は共有している。

Works Cited

- Ammons, Elizabeth. *Edith Wharton's Argument with America*. Athens: U of Georgia P, 1980.
- Lewis, R. W. B. *Edith Wharton: A Biography*. New York: Harper and Row, 1975.
- Rich, Adrienne. *Of Woman Born: Motherhood as Experience and Institution*. 1986. New York: W.W. Norton, 1995.
- Wershoven, Carol. *The Female Intruder in the Novels of Edith Wharton*. London and Toronto: Associated UPs, 1982.
- Wharton, Edith. *Twilight Sleep. The Complete Works of Edith Wharton*. Vol. XX. ed. Yoshie Itabashi and Miyoko Sasaki. Kyoto: Rinsen, 1989.
- Wolff, Cynthia Griffin. *A Feast of Words: The Triumph of Edith Wharton*. New York: Oxford UP, 1977.

G・バタイユ『エロティシズムの歴史』湯浅博雄・中地義和訳, 哲学書房, 1997.

クロード・レヴィ＝ストロース『親族の基本構造 (上)』馬渕東一・田島節夫監訳, 番町書房, 1977.

田中栄子「母と娘の構図Ⅰ—“The Old Maid”における母性のゆくえ」, 『大阪青山短期大学研究紀要』 vol.31, 71-77, 2006.

田中栄子「母と娘の構図Ⅱ—*The Mother's Recompense*に

描かれる幻想のMotherhood」, 『大阪青山短期大学研究紀要』 vol.32, 89-97, 2007.

トニー・タナー『姦通の文学 契約と違犯—ルソー, ゲーテ, フロベール』高橋和久・御興哲也訳, 朝日出版社, 1986.

マイケル・オマリー『時計と人間—アメリカの時間の歴史』高島平吾訳, 晶文社, 1996.